

顔の見える連携をつくる

「第 20 回日本在宅医療学会学術集会」開催

6 月 27 日(土)・28 日(日), パシフィコ横浜アネックスホール(横浜市西区)において第 20 回日本在宅医療学会学術集会が開催され, 740 名が参加した。

1 日目は谷亀光則大会長(東海大学医学部付属病院患者支援センター)が在宅の可能性, 在宅でしか実現できないよさを込めて「在宅でできる」をテーマとした, とその意気込みを語った開会挨拶で幕をあげた。

シンポジウム 1「在宅で和らげる」では, 田中美江子氏(訪問看護ステーション中井)が在宅緩和ケアの実施にあたって予測や事前指示が大事になると語り, 川越厚氏(パリアンクリニック川越)は今後在宅医療を専門別に, 看護師の裁量権拡大も求めたいと提言した。会場からは荻野美恵子氏(北里大学医学部神経内科)より「終末期の苦しみは同じであるにもかかわらず, がんに



2 日目に同時開催された「外来化学療法実践セミナー」

比べ, 神経難病が取り残されている」とのコメントがあり, 診療報酬上, 麻薬やホスピスの適応がなく訪問看護の点数も少なすぎるとの指摘も加えられた。

シンポジウム 2「在宅で食べる」では, 五島朋幸氏(ふれあい歯科ごとう)が課題として「食の意識改革」「ケア人材不足」「ネットワークの構築」を挙げ, 若林秀隆氏(横浜市立大学附属市民総合医療センター)は職種ごとに担当分野をもつのではなく, そこにいる職種で補い合う超職種型のチーム形態が重要と主張した。

2 日目のシンポジウム 4「在宅でつながる」では, 東京都新宿区のしんじゅく医療あんしんカード, 長崎市の長崎在宅 Dr ネットのプチメーリングリスト, 京都府乙訓地域の在宅療養手帳など, 各地域で連携に貢献するシステムが事例とともに紹介された。会場からのコメントも多く, 司会の英裕雄氏(新宿ヒロクリニック)は看護の役割も含め, 連携とはなにか, 根本的な部分を深めていく必要があるとまとめた。

「転院・退院支援——ソーシャルワーカーここにあり!」と題された特別企画も開催される一方, 2 日で 87 を数えた一般演題では, 腹膜透析や血液透析, 非導入などの症例を紹介した「在宅透析療法」や「在宅認知症高齢者とその家族介護者に対するテレビ電話システムを用いたコミュニケーションの有効性」など多くの発表がなされた。

次回は「シームレスな医療へ」をテーマに, 2010 年 6 月 12 日(土), 13 日(日), 東京ファッションタウンビル TFT ホール(東京都江東区)で開催の予定。